## そ の 87

影響を与えたと思わ て、天龍焼に大きく 「生没不詳」?とし このコラム86に 上げた。その前後、 れる大橋浩堂を取り 彼の書額や数点の陶

器作品、自ら彫った できた。 雅印にも出 会うことが

不

濁

祠畔」とあるので、 ていた「浩堂」の大 東京赤坂時代のもの 側面には「東都氷川 われた形跡がなく、 きな雅印はあまり使 息子昇堂が所持し の帳面で、1冊は らしい。 銘が刻まれていた。 いた題簽のない2冊 雅印は「浩堂刀」と 同じく昇堂が持って 面白かったのは、 また小さな に、嬉しかったのは

のと思うと、急に親 と。龍峡は日夏耿之 も浩堂がつくったも 介の叔父で、彼の印 印譜に「樋口蔵書」 「龍峡」があったこ

早苗住

前稿で書いた以上の るものであったが、 は、いずれも力のあ 近感がわいた。作品 その意は 暇。一年 するのに 三つの余 好都合な 三餘」。 「読書を

事実がわかったわけ ではなかった。 しかし前稿が「南 のうちでは冬、 額が寺にあったか覚 子を諭した語」らし 時間がないと嘆く弟 魏の薫遇が勉学する うちでは雨降りをい のうちでは夜、時の い。いつからこの書 う。中国三国時代、 日

堂書の 職の書斎 にある浩 浩堂居士





大橋浩堂、その後

書かれた篆書 表題が内側に 稿」(自筆明 印譜。 1冊は 治四十年)と 「古印体原

のテキストの る。個人的 ように思え ると、龍江の保寿寺 話をうかがった。 う情報がもたらされ にも書額があるとい たので、さっそく参 信州」紙に掲載され 上して早苗住職にお

えていないし、「浩

新聞で大橋浩堂の

概略を知り、その没

職が花園大学教授の あったらしく、その た時にはすでに寺に 職を辞し寺に戻られ 堂」が何者かは知ら なかったが、早苗住 書斎に架けてたまま 書や意が気に入って にしてあった。 郡呉服町三十番地」で葬っていたことが てくださったらしてと、過去帳を捲っ 年月日がほぼ特定で た大橋浩堂は保寿寺 い。そして、縊死し や姿のわかる写真があとは、浩堂の顔 橋浩堂」ファイルも揃えば、小生の「大 郎」という本名も判 ばかりか、「片江萬太 明したのである。 と本籍も確認できた 一応完成する。

祠畔 浩堂」の銘が読み取れる東京赤坂時代の雅印「東都氷川 「東都氷川